

看護師による 在宅看護の起業から30年

在宅看護研究センター(村松静子代表)が設立30年を迎え、その記念会および交流会が5月8日、東京のアルカディア市ヶ谷(私学文芸館)で開かれた。看護職をはじめ介護職、医師、在宅療養者家族友人(応援者)、報道・出版関係者など159人が参加。そのなかには現厚生労働省元看護課長の清水嘉子氏(1999〜2000年、環境庁長官)、同・野村陽子氏(現京都橋大学教授)の顔もあり、小規模ながらも、当センターが看護行政に少なからぬ影響を及ぼしてきたことがうかがわれた。

在宅看護研究センターが発足したのは1986年。日赤医療センターに新設されたICUに看護師長として抜擢され多忙をきわめていた村松氏が、ある患者家族からの「助けてください」の声に応え、志を同じくする後輩看護師とともに始めた在宅看護ボランティア活動が基点になっている。その活動を後押ししたのが作家の遠藤周作氏。「ボランティアで続けるのは無理。これからはもっと必要になる。会社を設立して事業化すれば」の一言とともに、その実現にも手を貸してくれた。

やると決めたらとことんやるのが村松氏の流儀。本邦初の看護師による看護の事業化が歩み始める。一緒に病院を飛び

出し、会社設立に参画した守田美奈子氏(現日赤看護大学教授・図書館長)と松沼瑠美子氏(現才門商事医療経営コンサルティングパートナー)のうち、当時子育て中だった松沼氏は0・5人の勤定、フルタイムの村松・守田の両氏に半人前(?)の松沼氏が加わり、2・5人の看護師による在宅看護のための有限会社がスタートした。

在宅看護 研究センター 設立30周年記念会 に参加して メッセンジャーナースに かける思い

元医学書院編集者
林田秀治

のちに訪問看護ステーションが制度化されるにあたり設立要件となった2・5人の人員基準は、在宅看護研究センターがモデルとなったといわれている。2・5人といういかにも半端な数字には、明らかにパートタイムでも働ける看護の職場が想定されており、新制度にコンマ5が明記された意味はそれなりに大きい。しかし、この数字はあくまでも制度を設

計・管理していく立場から見た数字。つまり、員数×時間で看護を評価する便宜上の尺度であって、量の評価にはなっても質の評価はできない。異なるライフコースを歩むメンバーで事業を興した村松氏のねらいは、その先にあったのではない。看護には多様な社会的機能があり、それに対応する働く場・働き方があつていいはずだという村松氏のゆるぎない信念が起業への原動力となり、「よい看護は時間だけじゃ計れない、中身だよ」と言い切れる、あるべき看護への不

断のチャレンジがここに始まったのだ。そう見ると、センターが開設されて30年、在宅看護の実践を中核にしてナース教育、ヘルパー教育、看護コンサルタン

キーワードは メッセンジャーナース

30周年記念会の表題に記されていたのは「これからもあなたの主体的医療を支え続けます!——暮らしに伴走する

メッセンジャーナース」。この耳慣れないメッセンジャーナースが当日のキーワードだった。

2部構成のプログラムのうち、第1部冒頭の講話を担当したのは行天良雄氏(医事評論家・元NHKディレクター)。医学生時代に体験した東京大空襲の筆舌に尽くし難い凄絶・悲惨な体験から語り始め、すでに人口減少を迎えた日本では縮小経済が不可避となり、これまで国民に等しく医療を受ける権利を保障してきた皆保険制度すら崩壊しかねない厳しい時代が到来すると予測。あえて暗い話題を提供した意図にはふれなかったものの、多難な時代だからこそ、時流に阿ることなく看護の存在意義をしっかりと認識する必要性を示唆したものと受け止められた。なぜ、いま、村松氏はメッセンジャーナースを提唱しているのか。両者の思いはそこをつながるのだ。

リレー対談「センターの歴史」と思いつく「これら」には、仲野佳代子氏、片岡美知子氏に司会の鈴木紀子氏(現村松氏を交えてセンターの30年を駆け足で振り返った。つづく第2部「暮らしに伴走するメッセンジャーナースとは?」では、各地で活躍し始めたメッセンジャーナースからの実践報告を中心に意見交換が進められた。第1部を担当したセンターのベテランメンバーから第2部でパトンを受けたのは、メッセンジャーナースの面々。村松氏の構想に共感してセン

ターに加わった新しい顔ぶれだ。進行役を務めた甲州優、武田美和、川口奏子の三氏は、この記念会をめぐって刊行された『メッセンジャーナース——看護の本質に迫る』（村松静子監修、看護の科学社2016）の編集・執筆にも携わっており、メッセンジャーナースを周知・普及する牽引役として活躍が期待されている。十年一昔といわれ、ワンジェネレーションの区切りとなるのが30年。記念会が二部で構成されていたのは、新旧の世代交代を暗示する意味合いがそこに込められていたようだ。

医療そのもののサービスの態様を 限なく映す合わせ鏡のように

メッセンジャーナースとは何か、を説明するのは難しい。幸いにも前掲書が刊行されたので、この名称に少しでも興味をもたれた方には一読をお勧めしたい。本書の冒頭で村松氏が記した一文を手掛かりにすると、イメージが膨らんでくるのではないだろうか。

「メッセンジャーナースとは、看護の本質により迫る看護師として、療養者・家族に寄り添い、医療の受け手と医療者をつなぐ架け橋となる看護師のことである」

医療が高度専門化、複雑化するのに伴い、看護の分野にも高等教育化をさらに進める専門看護師・認定看護師制度が導入されるなど、職種としての高度・専門



各地のメッセンジャーナースが登壇し、それぞれの活動や思いを語った

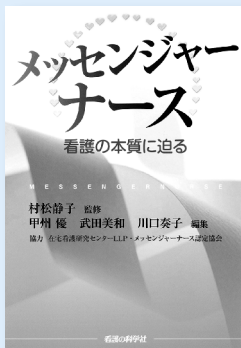
化の充実も目覚ましい。しかし、何かが足りないと感じている看護師は少なくない。とくに在宅分野で活躍する看護師はハイテクよりもハイタッチを志向する傾向が強いだけに、そこでも職種が分化し診療・介護報酬の縛りで仕事が一歩一歩進んでいる現状に不全感を拭えないのではないだろうか。

一体、何が足りないのだろうか。メッセンジャーナースという新たな概念を導入すると、逆に不足しているものが、しかもはつきりが見えてくる。つまり、メッセンジャーナースは看護、否、医療そのもののサービスの態様を限なく映す、合わせ鏡として機能することにもなるのだ。本書の副題に「看護の本質に迫る」と記されているのはハタタリではない。

メッセンジャーナースが 根づくまでは

記念会に続いて開かれた交流会で川島みどり氏（日赤看護大学名誉教授、健和会臨床看護学研究所所長）が祝辞として述べた言葉が印象深かった。臨床実践を重んじつつ看護の科学化を一貫して追求してきた川島氏は、看護界で特別な存在として見られており、看護職からの尊敬の念を集めてきたのは周知の通りだが、村松氏がボランティアで在宅看護を始めた当初から氏を支援し続けてきたことを知る人はそう多くはないのではないかと。その川島氏が村松氏のこれまでの歩み

について、ナイチンゲールの著書を引用しつつ、両者の共通点がいかに多いかを縷々述べたのである。手放しの評価であり、これに勝る賛辞はないと思えるものだった。その場にいた参加者も、30年とまでは言わないまでも、少なくとも次の10年はメッセンジャーナースを根づかせるためにも、そして、看護への社会的認知をこれまでになく高めた看護パイオニアとして、村松氏には現役バリバリで活躍し続けてほしいと願っていたに違いない。



メッセンジャーナース
看護の本質に迫る
村松静子 監修
甲州優・武田美和・川口奏子 編
看護の科学社